

●市民記者が行く——市長インタビュー

地域の特色を生かしたまちづくりを

4月の市長選で3選を果たし、今後4年間の山武市の「舵取り役」を担うことになった椎名千収市長。今月号の「市民記者が行く」は、市民目線で市長にお話をうかがいました。あまり語られることのない子ども時代の思い出や描いていた夢、そして3期目に向けた抱負、まちづくりへ向けた施策などを話していただきました。

(5月13日インタビュー／聞き手・市民編集準備委員)

ノーベル賞をとるのが夢だった

——少年時代はどんな子どもだったのでしょうか。

小学校は成東小学校でした。4月生まれなので、小学校の1年、2年のころは、ほかの子よりも体が大きかったですね。ナイフで竹を削ったり、ブリキ板を曲げたりする工作が好きで、毎日どこか怪我をしていました。

勉強は暗記物が苦手で、得意だったのは理数系。モノをつくるのが好きだったこともあり、将来は物理を勉強してノーベル賞をとれたらなんて、夢がありました。でも、忘れ物と宿題忘れはクラスでもトップクラス。教室に棒グラフ

フで張り出されるのですが、ボクと友人の二人で競い合っていました。自慢にはなりませんけど(笑)。

——中学からは東京の開成中学・高校へと進みますが……。

ええ、母の弟が開成出身だったので……受けたら、たまたま入っていたという感じです。成東からだと通学ができないので、母の実家のある市川から通いました。

子どもの頃から釣りが好きで、休みでこっちに帰ってくると、朝の3時に自転車で作田川の下流や東金の雄蛇ヶ池にヘラブナ釣りに出かけたものです。餌はサツマイモを裏ごししてつくりましたが、当時はサツマイモの種類や値段には詳しくありませんでした。これも、自慢にはなりませんね。

夢やぶれてフランスへ留学

——大学時代はいかがですか？

小学校高学年から器械体操をやり始め、中学・高校とつづけました。吊り輪ではものすごく筋力が必要ですが、どうしても筋肉がついていかない。それでマネジャー的なことをやりました。

大学は理科系ということで東北大学の理学部に進みますが、大学の数学が難しかった。これではノーベル賞は無理だとあきらめ、テニスに夢中になります。目標を見失っていたんですね。

結局、卒業できずに家に戻りますが、父も母もがっかりしたと思いますね。2年ほど家業(油屋)



●飛び箱でポーズを決める (小学6年生)

●お姉さんと一緒に (5歳のころ)



を手伝いながらフランス語を学び、フランスへ留学します。パリ大学では文系にシフトし、計量経済学を学びました。できなかったとはいえ、数学が役に立ったから不思議です。このころが一番勉強した時期ですね。

**思いもかけずに  
46歳で町長選に**

——卒業されてから日本に帰られるわけですね。

大学を終えたら、初めは向こうの海外機関に勤めようと思ってい

たんですが、父が突然訪ねてきたんです。親子で腹を割って話すなんてほとんどなかったんですが、「町長選に出ようと思うんだけど、代わりに商売を継いでくれないか」とびっくりですよ。

父の本当の気持ち伝わってきましたし、ボクならもっと商売がうまくやれるかと考えたんです。が、そんな甘いもんじゃないですよ、商売って。ただ、高度経済成長の時代でしたから、なんとか乗り切ることができました。

——その後、ご自身が町長選に出ること……。

父が3期目で敗れても、まったく考えていませんでした。ところが次の町長が2期目の半ばで失職。50日後に選挙があるのに誰も名乗りを上げないんです。商店街の仲間と「40代でももっと政治に関心をもつてほしいかもしれないね」などと気楽に話していたら、どうもやる気があるみたいだと「誤解」されて……。

46歳でした。父には最後まで黙っていましたが、父の後援会にも内緒にしてみました。自分達の世代で自分達の考える選挙をやろうと思っていましたので。

**ソフト面での  
まちづくりを**

——町長を3期、そして市長も今回で3期目になられますね。

この二十数年で多くのことを勉強させていただきました。地方政治では議会に一定の野党的な役割を求める学者先生の意見もありましたが、そんなことはないんですね。首長を社長、議会を取締役会と置き換えると、意見が対立してはものごとが進まなくなってしまうと思います。むしろ、取締役会の意見を汲みとって、経営判断を下していくというほうが確な環境対応ができると思うんです。

——3町1村が合併して9年目を迎えます。市民からは合併の効果が見えにくいと思うのですが。

行政を担当する立場からは、財政的に運営しやすくなっています。さらに、先の東日本大震災による津波被害では、一町村だけだったらきちんと対応できたかというところ、かなり難しい。それが山



●高校時代、修学旅行で

武市という枠組みがあったからこそ、なんとかできたといえるでしょう。さらに、今後は市として福祉に対する態勢を整えていかなければなりません。やはり大きな枠組みだからこそ、取り組めていけるのではと考えています。

行政と市民の皆さまとの距離感が遠くなったという不満の声が伝わってきています。行政の効率化の結果ですが、これからのまちづくりは、各地域の特色を生かして、分散型のコミュニティをつくっていかねばならないと思います。いまは松尾地区での「にぎわい創出」や蓮沼地区での「蓮沼タワー」などハード的な面が目立ちますが、目指しているのはソフト面のまちづくりです。

椎名市政の総仕上げとして元気な山武市を創造し、次の世代に誇れるまちづくりを進めていけるようにしたいですね。

——本日は長時間、ありがとうございました。